

建設の碑

関門国道トンネルの碑 その二 殉職者慰霊碑

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

関 門国道トンネルの青い壁面は、十分な照明に照らされて、明るく清潔な印象があり、トンネル内とは思えないほど換気も施されていた。

まっすぐなトンネルを五分ほど進むと、ほぼ中間地点に山口県と福岡県の県境を示すラインが敷かれており、絶好の撮影スポットとなっていた。同行者もラインをまたいで海底での九州初上陸を果たしたが、どうも実感がわかないらしく、感想を尋ねても反応は薄かった。やはり空路や海路など、手間も時間も金もかけたほうが、いかにも上陸したという気持ちになるのかもしれない。

一〇分ほどの海底歩行を終えて、対岸の門司側口の待機場に到着すると、同行者が目ざとく記念スタンプを発見した。自前のスタンプ帳を取り出して、嬉しそうに駆け寄ると、なにやら「失敗した、失敗した」と喚ぎだした。なんでもスタンプは片割れで、下関側口のスタンプと合わせて一つの形となるらしかった。「下関のを見逃した」と悔しそうに言うので、ならば戻ればいいじゃないのと、もと来た道を引き返すことにした。

そうして、二度も同じ道を歩いていると、トレーニングウェアの同じ人とすれ違うことに気がついた。ウォーキングで利用する人が、早足で何往復もして

いるらしく、先に見かけた初老の夫婦もせっせと我々を追い越していった。せっかく天気がよいのだから、海峡沿いでも歩けばよいのにも思ったが、本州と九州との往復回数を重ねることが、継続のモチベーションとなっているのかもしれない。

着工当時から工事に携わり、最後の工事事務所長を務めた住友彰氏は、世界初の海底人道トンネルを建設することに強い思いを抱いていたというが、このようなトンネル活用方法があるとは、健康ブーム到来はるか以前の建設当時には思いもよらなかっただろう。我々も負けじとひた歩き、無事にスタンプをすませて一往復余分の海底の旅を終えた。

事前に眼を通した文献によると、門司側の入口ビルの近くには、トンネル工事殉職者の慰霊碑があるはずだった。付近をみまわし、入口ビルに向かって左奥の階段にあたりをつけると、果たして階段上のスペースに碑が建てられていた。黒御影石が貼られた立方体の慰霊碑には、病没者を合わせて八九名の名前が刻まれている。やはりこの工事でも多くの人が亡くなっており、丹那トンネルの慰霊碑と同じく女性の名前も見えた。

合掌をすませて前方を見ると、関門橋の巨大な姿がすぐ目の前にあった。この距離だとかなりの迫力

があり、橋は今来たばかりの下関へと長く延びていた。関門橋建設以前の昭和初年にも、関門海峡に橋を架ける計画が立案されていたが、敵の攻撃目標になりやすいという軍部の意見によって却下され、海底道路トンネル案が採用されたという。暗雲たれこめる時代では、橋を架けることもままならない。関門橋をはじめとする長大橋梁は、いわば平和の象徴なのだ。



殉職者慰霊碑

[交通]関門国道トンネルの門司側入口にある。

※関連写真を日建連HPに掲載しています。